

中国怪奇小説集

閱微草堂筆記（清）

岡本綺堂

青空文庫

第十五の男は語る。

「わたくしは最後に『閱微草堂筆記』を受持つことになりましたが、これは前の『子不語』にまさる大物で、作者は観奕道人かんえきどうじんと署名してありますが、実は清の紀昀しんきいんであります。紀昀は号を暁嵐ようらんといい、乾隆時代けんりゅうの進士しんしで、協弁大学士に進み、官選の四庫全書を作る時には編集総裁に挙げられ、学者として、詩人として知られて居ります。死して文達公と諡おくりなされましたので、普通通に紀文達とも申します。

この著作は一度に脱稿したのではなく、最初に『灤陽鎖らんようしやう夏録かろく』六巻を編み、次に『如是我聞にょぜがもん』四巻、次に『槐西雜誌かいせいぎ』

四卷、次に『姑妄聴之』^{こもうちようし} 四卷、次に『灤陽統録』^{らんようぞくろく} 六卷を編み、あわせて二十四卷に及んだものを集成して、『閱微草堂筆記』の名を冠^{かぶ}らせたのでありまして、実に一千二百八十二種の奇事異聞を蒐^{しゅう}録^{ろく}してあるのですから、とても一朝一夕に説き尽くされるわけのものではありません。もしその全貌を知ろうとおぼしめす方は、どうぞ原本に就いてゆるゆる御閲読をねがいます」

落雷裁判

清^{しん}の雍正^{ようせい}十年六月の夜に大雷雨がおこつて、猷^{けん}県の县城の西にある某村では、村民なにがしが落雷に撃たれて死んだ。

明^{めい}という県令が出張して、その死体を検視したが、それから半月の後、突然ある者を捕えて訊問した。

「おまえは何のために火薬を買ったのだ」

「鳥を捕るためでございます」

「雀^{たまぐすり}ぐらいを撃つ弾薬ならば幾らもある筈はない。おまえは

何で二、三十斤^{きん}の火薬を買ったのだ」

「一度に買い込んで、貯えて置こうと思ったのでございます」

「おまえは火薬を買ってから、まだひと月にもならない。多く費したとしても、一斤か二斤に過ぎない筈だが、残りの薬はどこに貯えてある」

これには彼も行き詰まって、とうとう白状した。彼はかの村民

の妻と姦通していて、妻と共謀の末にその夫を爆殺し、あたかも落雷で震死したようによそおつたのであつた。その裁判落着の後、ある人が県令に訊いた。

「あなたはどうしてあの男に眼を着けられたのですか」

「火薬を爆発させて雷らいと見せるには、どうしても数十斤を要する。殊に合ごうやく薬として硫黄いおうを用いなければならない。今は暑中で爆竹などを放つ時節でないから、硫黄のたぐいを買う人間は極めてすくない。わたしはひそかに人をやつて、この町でたくさんの硫黄を買つた者を調べさせると、その買い手はすぐに判つた。更にその買い手を調べさせると、村民のなにがしに売つたという。それで彼が犯人であると判つたのだ」

「それにしても、当夜の雷がこしらえ物であるということはどうして判りました」

「雷が人を撃つ場合は、言うまでもなく上から下へ落ちる。家屋を撃ちこわす場合は、家根^{やね}を打ち破るばかりで、地を傷めないのが普通である。然るに今度の落雷の現場を取調べると、草葺き家根が上にむかつて飛んでいるばかりか、土間の地面が引きめくつたように剥^はがれている。それが不審の第一である。又その現場は城を距^さること僅か五、六里で、雷電もほぼ同じかるべき筈であるが、当夜の雷はかなり迅烈であつたとはいえ、みな空中をとどろき渡っているばかりで、落雷した様子はなかった。それらを綜合して、わたしはそれを地上の偽雷と認めたのである」

人は県令の明察に服した。

鄭成功と異僧

鄭成功ていせいこうが台湾たいわんに拠よるとき、粵東えつとうの地方から一人の異僧が海を渡つて来た。かれは劍術と拳法に精達しているばかりか、肌をぬいで端坐していると、刃で撃つても切ることが出来ず、堅きこと鉄石の如くであつた。彼はまた軍法にも通じていて、兵を談ずることすこぶるその要を得ていた。

鄭成功は努つとめて四方の豪傑を招いている際であつたので、礼を厚うして彼を款待かんたいしたが、日を経るにしたがつて彼はだんだん

に増長して、傲慢無礼ごうまんぶれいの振舞いがたびかさなるので、鄭成功もしまいには堪えられなくなつて来た。且かつかれは清国の間かん牒ちようであるという疑いも生じて来たので、いつそ彼を殺してしまおうと思つたが、前にもいう通り、彼は武芸に達している上に、一種の不死身ふじみのような妖僧であるので、迂闊に手を出すことを躊躇ちゆうちよしている、その大将の劉国軒りゆうこくけんが言つた。

「よろしい。その役目はわたくしが勤めましょう」

劉はかの僧をたずねて、冗談のように話しかけた。

「あなたのような生き仏は、色情のことはなんにもお考えになりますまいな」

「久しく修業を積んでいますから、心は地に落ちたる絮わたの如くで

「ござる」と、僧は答えた。

劉はいよいよ戯たわむれるように言つた。

「それでは、ここでああなたの道心を試みて、いよいよ諸人の信仰を高めさせて見たいものです」

そこで美しい遊女や、男なんしよく色いろを売る少年や、十人あまりをえ

りあつめて、僧のまわりに茵しとねをしき、枕をならべさせて、その淫

樂をほしいままにさせると、僧は眉をも動かさず、かたわらに人なきがごとくに談笑自若としていたが、時を経るにつれて眼をそむけて、遂にその眼をまったく瞑とじた。

その隙すきをみて、劉は剣をぬいたかと思うと、僧の首はころりと床に落ちた。

鬼影

泉州^{せん}の人が或る夜、ともしびの前で自分の影をみかえると、壁に映っているのは自分の形でなかった。

不思議に思つてよく視ると、大きい首に長い髪が乱れかかつて、手足は鳥の爪のように曲がつて尖っている。その影はたしかに一種の鬼であつた。しかも、その怪しい影は自分の形に伴つていて、自分の動く通りに動いているのである。大いにおどろいて家内の者を呼びあつめると、その影は誰の眼にも怪しく見えるのであつた。

それが毎晩つづくので、その人も怖ろしくなった。家内の者もみな懼れた。^{おそ}しかしその子細は判らないので、唯いたずらに憂い懼れていると、となりに住んでゐる塾の先生が言つた。

「すべての妖はみずから興^{おこ}るのでなく、人に因つて興るのである。あなたは人に知られない悪念を懷^{いだ}いてゐるので、その心の影が羅^ら刹^{せつ}となつて現われるのではあるまいか」

その人は慄^{りつぜん}然として、先生の前に懺悔^{ざんげ}した。

「実はわたくしは或る人に恨みを含んでゐるので、近いうちにその一家をみな殺しにして、ここを逃げ去つて、賊徒の群れに投じようかと考えていたところでした。今のお話でわたくしも怖ろしくなりました。そんな企ては断然やめます」

その晩から彼の影は元の形に復かえつた。

茉莉花

閩みんちゅう 中の或る人の娘はまだ嫁入りをしないうちに死んだ。それを葬ること式かたのごとくであつた。

それから一年ほど過ぎた後、その親戚の者がとなりの県で、彼女とおなじ女を見た。その顔かたちから声こわね音までが余りによく肖にているので、不意にその幼な名を呼びかけると、彼女は思わず振り返ったが、又もや足を早めて立ち去った。

親戚は郷里へ歸つてそれを報告したので、両親も怪しんで娘の

塚をあけてみると、果たして棺のなかは空からになっていた。そこで、そのありかを尋ねてゆくと、女は両親を識らないと言い張っていたが、その腋わきの下に大きい痣あざがあるのが証拠となつて、彼女はとうとう恐れ入った。その相手の男をたずねると、もうどこへか姿をかくしていた。

だんだんその事情を取調べると、閩中には茉莉花まつりかを飲めば仮死するという伝説がある。茉莉花の根を磨すつて、酒にまぜ合わせて飲むのである。根の長さ一寸を用ゆれば、仮死すること一日にして蘇生する。六、七寸を用ゆれば、仮死すること数日にしてなお蘇生することが出来る。七寸以上を用ゆれば、本当に死んでしまふのである。かの娘はすでに約束の婿がありながら、他の男と情

を通じたので、男と相談の上で茉莉花を用い、そら死にをしてい
旦葬^{つたん}られた後に、男が棺をあばいて連れ出したものであること
が判った。男もやがて捕われたが、その申し立ては娘と同様であ
った。

閩の県官呉林塘^{ごりんとう}という人がそれを裁判したが、棺をあばいた
罪に照らそうとすれば、その人は死んでいないのである。薬剤を
もって子女を惑わしたという罪に問おうとすれば、娘も最初から
共謀である。さりとて、財物を奪ったとか、拐^{かど}引^{わかし}を働いたと
かいうのでもない。結局、その娘も男も姦^{かん}通^{つう}の罪に処せられる
ことになった。

仏陀の示現

景^{けいじょう}城^{じょう}

の南に古寺があつた。あたりに人家もなく、その寺に住職と二人の徒弟^{とてい}が住んでいたが、いずれもぼんやりした者どもで、わずかに仏前に香火を供うるのほかには能がないように見られた。

しかも彼等はなかなかの曲^{くせもの}者で、ひそかに松脂^{まつやに}を買つて来て、それを粉にして練りあわせ、紙にまいて火をつけて、夜ちゆうに高く飛ばせると、その火のひかりは四方を照らした。それを望んで村民が駈けつけると、住職も徒弟も戸を閉じて熟睡して、なんにも知らないというのである。

又あるときは、戯場しばいで用いる仏衣を買つて来て、菩薩や羅漢の形をよそおい、月の明るい夜に家根の上に立ったり、樹の蔭にたたずんだりする事もある。それを望んで駈け付けると、やはりなんにも知らないというのである。或る者がその話をする、住職らは合掌して答えた。

「飛んでもないことを仰しやるな。み仏は遠い西の空にござる。なんでこんな田舎の破寺やれでらに示現しげんなされましようぞ。お上かみではただいま白蓮びやくれんきよう教をきびしく禁じていられます。そんな噂がきこえると、われわれもその邪教をおこなう者と見なされて、どんなお咎めとがを蒙こうむるかも知れません。お前方もわれわれに恨みがある訳でもござるまいに、そんなことを無暗に言い触らして、われわ

れに迷惑をかけて下さるな」

いかにも殊勝な申し分であるので、諸人はいよいよ仏陀の示現と信じるようになって、檀家の布施ふせや寄進きしんが日ましに多くなつた。それに付けても、寺があまりに荒れ朽ちているので、その修繕を勧める者があると、僧らは、一本の柱、一枚の瓦を換えることも承知しなかつた。

「ここらの人はとかくにあらぬことを言い触らす癖があつて、後ご光こうがさしたの、菩薩があらわれたのと言う。その矢さきに堂塔などを莊嚴そうごんにいたしたら、それに就いて又もや何を言い出すか判らない。どなたが寄進して下さるといっても、寺の修繕などはお断わり申します」

こういうふうであるから、諸人の信仰はいや増すばかりで、僧らは十余年のあいだに大いなる富を作ったが、又それを知っている賊徒があつて、ある夜この寺を襲つて師弟三人を殺し、貯蓄の財貨をことごとく掠めて去った。役人が来て検視の際に、古い箱のなかから戯場の衣裳や松脂の粉を発見して、ここに初めてこれらの巧みが露顕したのであつた。

これは明の崇禎の末年のことである。

強盜

齊大は猷県の地方を横行する強盜であつた。

あるとき味方の者を大勢おおぜい連れて或る家へ押し込むと、その家の娘が美婦びふであるので、賊徒は逼せまつてこれを汚けがそうとしたが、女がなかなか応じないので、かれらは女をうしろ手にくくりあげた。そのとき斉大は家根に登つて、近所の者や捕手の来るのを見張つていたが、女の泣き叫ぶ声を聞きつけて、降りて来てみるとこの体ていたらくである。彼は刃をぬいてその場に跳おどり込んだ。

「貴様らは何でそんなことをする。こうなれば、おれが相手だぞ」
餓えたる虎のごとき眼を晃ひからせて、彼はあたりを睨みまわしたので、賊徒は恐れて手を引いて、女の節操は幸いに救われた。

その後、この賊徒の一群はみな捕えられたが、ただその頭領の斉大だけは不思議に逃がれた。賊徒の申し立てによれば、逮捕

の当時、齊大はまぐさ桶おけの下に隠れていたというのであるが、捕手らの眼にはそれが見えなかった。まぐさ桶の下には古い竹束が転がっていただけであつた。

張福の遺書

張ちようふく福とりんちんは杜林鎮とりんちんの人で、荷物の運搬を業としていた。ある日、途中で村の豪家の主人に出逢つたが、たがいに路を譲らないために喧嘩をはじめて、豪家の主人は従僕に指図して張を石橋の下へ突き落した。あたかも川の氷が固くなつて、その稜かどは刃のよううに尖っていたので、張はあたまを撃ち割られて半死半生になつ

た。

村役人は平生からその豪家を憎んでいたもので、すぐに官に訴えた。官の役人も相手が豪家であるから、この際いじめつけてやろうというので、その詮議が甚だ嚴重になった。そのときに重態の張はひそかに母を豪家へつかわして、こう言わせた。

「わたしの代りにあなたの命を取つても仕方ありません。わたしの亡い後に、老母や幼な児の世話をし下さるというならば、わたしは自分の粗相で滑り落ちたと申し立てます」

豪家では無論に承知した。張はどうか文字の書ける男であるので、その通りに書き残して死んだ。何分にも本人自身の書置きがあつて、豪家の無罪は証明されているのであるから、役人たち

もどうすることも出来ないで、この一件は無事に落着らくぢやくした。

張の死んだ後、豪家も最初は約束を守っていたが、だんだんにそれを怠るようになったので、張の老母は怨み憤って官に訴えたが、張が自筆の生き証拠がある以上、今更この事件の審議をくつがえす事は出来なかつた。

しかもその豪家の主人は、ある夜、酒に酔つてかの川べりを通ると、馬がにわかに駭おどろいたために川のなかへ転げ落ちて、あたかも張とおなじ場所で死んだ。

知る者はみな張に背いた報いであると言つた。世の訴訟事件には往々おうおうこうした秘密がある。獄を断ずる者は深く考えなければならぬ。

飛天夜叉

ウロボクセイ 烏魯木齊は新^{しんきよう}疆^{きやう}の一地方で、甚だ未開^{へんぺき}辺僻^{へんぺき}の地である

（筆者、紀曉嵐は曾^{かつ}てこの地にあつたので、烏魯木齊地方の出来事をたくさんに書いている）。その把總^{はそう}（軍官で、陸軍少尉^{しょううい}の如きものである）を勤めている蔡良棟^{さいりやうとう}が話した。

この地方が初めて平定した時、四方を巡回して南山の深いところへ分け入ると、日もようやく暮れかかつて来た。見ると、溪^{たに}を隔てた向う岸に人の影がある。もしや瑪哈沁^{ひやうはしん}（この地方でいう追剥^{おいは}ぎである）ではないかと疑つて、草むらに身をひそめて窺う

と、一人の軍装をした男が磐石の上に坐つて、そのそばには相貌どうあく猥惡の従卒が数人控えている。なにか言っているらしいが、遠いのでよく聴き取れない。

やがて一人の従卒に指図して、石の洞ほらから六人の女をひき出して来た。女はみな色の白い、美しい者ばかりで、身にはいろいろな色彩いろどりのある美服を着けていたが、いずれも後ろ手にくくり上げられて恐るおそるに頭かしらを垂れてひざまずくと、石上の男はかれらを一人ずつ自分の前に召し出して、下衣したぎを剥ぬがせて地にひき伏せ、鞭むちをあげて打ち据えるのである。打てば血が流れ、その哀あいご号うの声はあたりの森に木飮こだまして、凄慘実たに譬たとえようもなかった。

その折檻が終ると、男は従卒と共にどこへか立ち去った。女ど

もはそれを見送り果てて、いずれも泣く泣く元の洞へ歸つて行つた。男は何者であるか、女は何者であるか、もとより判らない。一行のうちに弓をよく引く者があつたので、向う岸の立ち木にむかつて二本の矢を射込んで歸つた。

あくる日、廻り路をして向う岸へ行き着いて、きのうの矢を目じるしに搜索すると、石の洞門は塵に封じられていた。松明^{たいまつ}をとつて進み入ると、深さ四丈ばかりで行き止まりになつてしまつて、他には抜け路もないらしく、結局なんの獲^うるところもなしに引き揚げて來た。

蔡はこの話をして、自分が烏魯木齊にあるあいだに目撃した奇怪の事件は、これをもつて第一と言つた。わたしにも判ら

ないが、太平広記に、天人が飛天夜叉ひてんやしやを捕えて成敗する話が載せてある。飛天夜叉は美女である。蔡の見たのも或いはこの夜叉のたぐいであるかも知れない。

喇嘛教

喇嘛教らまきようには二種あつて、一を黄教といい、他を紅教といい、その衣服をもつて区別するのである。黄教は道德を講じ、因果を明らかにし、かの禪家ぜんけと派ことを異にして源を同じゆうするものである。

但し紅教は幻術げんじゆつを巧みにするものである。理藩院りはんいんの尚書

を勤める留りゅうという人が曾て西藏ちべつとに駐在しているときに、何かの

事で一人の紅教喇嘛に恨まれた。そこで、或る人が注意した。

「彼は復讐をするかも知れません。山登りのときには御用心なさい」

留は山へ登るとき、輿や行列をさきにして、自分は馬に乗って後から行くと、果たして山の半腹に至った頃に、前列の馬が俄かに狂い立って、輿をめちやめちやに踏みこわした。輿は無論に空からであつた。

また、烏魯木斉に従軍の当時、軍士のうちで馬を失った者があつた。一人の紅教喇嘛が小さい木の腰掛けをとつて、なにか暫く呪文を唱えていると、腰掛けは自然にころころと転がり始めたの

で、その行くさきを追つてゆくと、ある谷間^{たにあい}へ行き着いて、果たしてそこにかの馬を発見した。これは著者が親しく目撃したことである。

案ずるに、西域^{せいいき}に刀を呑み、火を呑むたぐいの幻術を善くする者あることは、前漢時代の記録にも見えている。これも恐らくそれらの遺術を相伝したもので、仏氏の正^{しょう}法^{ほう}ではない。それであるから、黄教の者は紅教徒を称して、あるいは魔^まといい、あるいは波羅門^{ばらもん}という。すなわち仏経にいわゆる邪魔^{じやまげどう}外道である。けだし、そのたぐいであろう。

滴血

晋しんの人でその資産を弟に托たくして、久しく他郷たきように出商いをして
いる者があつた。旅さきで妻を娶めとつて一人の子を儲けたが、十年
あまりの後に妻が病死したので、その子連れて故郷へ歸つて来
た。

兄が子連れて歸つた以上、弟はその資産をその子に譲り渡さ
なければならぬので、その子は兄の実子でなく、旅さきの妻が
他人の種を宿して生んだものであるから、異姓の子に資産を譲る
ことは出来ないと主張した。それが一種の口実こうじつであることは大
抵想像されているものの、何分にも旅さきの事といい、その妻も
もう此の世にはいないので、事実の真偽を確かめるのがむずかし

く、たがいにもんちやく 捌 着 をかさねた末に、官へ訴えて出ることになった。

官の力で調査したならば、弟の申し立てが嘘か本当かを知ることが出来たかも知れないが、役人らはいたずらに古法を守って、滴て血きけつをおこなうことにした。兄の血と、その子の血とを一つ器うつわにそそぎ入れて、それが一つに融け合うかどうかを試したのである。幸いにその血が一つに合ったので、裁判は直ちに兄側の勝訴となつて、弟は答むちうつて放逐するという宣告を受けた。

しかし弟は、滴血などという古風の裁判を信じないと言つた。彼は自分にも一人の子があるので、試みにその血をそそいでみると、かれらの血は一つに合わなかった。彼はそれを証拠にして、

現在、父子おやこすらもその血が一つに合わないのであるから、滴血な
どをもつて裁判をくだされては甚だ迷惑であると、逆捻さかねじに上訴
した。彼としては相当の理屈もあつたのであろうが、不幸にして
彼は周囲の人びとから憎まれていた。

「あの父子の血が一つに寄らないのは当り前だ。あの男の女房は、
ほかの男と姦通しているのだ」

この噂が官にきこえて、その妻を拘引して吟味すると、果たし
てそれが事実であつたので、弟は面目を失つて、妻を捨て、子を
捨てて、どこへか夜逃げをしてしまった。その資産はとどこおり
なく兄に引き渡された。

由来、滴血のことは遠い漢代から伝えられているが、経験ある

老吏について著者の聞いたところに拠ると、親身の者の血が一つに合うのは事実である。しかし冬の寒い時に、その器を冷やして血をそそぐか、あるいは夏の暑いときに、塩と酢をもつてその器を拭いた上で血をそそぐと、いずれもその血が別々に凝結して一つに寄り合わない。そういう特殊の場合がいろいろあるから、迂闊に滴血などを信ずるのは危険であると、彼は説明した。

成程そうであろうと思われる。しかしこの場合、もし滴血をおこなわなければ、弟はおそらく上訴しなかったであろう。弟が上訴しなければ、その妻の陰事いんじは摘発されなかったであろう。妻の陰事が露顕しなければ、この裁判はいつまでも落着らくちやくしなかったであろう。こうなると、あながちに役人の不用意を咎めるわけ

にも行かない。そのあいだには何か自然の約束があるようにも思われるではないか。

不思議な顔

蒙陰もういんの劉生りゅうせいがある時その従弟いとこの家に泊まった。いろいろの話の末に、この頃この家には一種の怪物があらわれる。出没常ならず、どこに潜んでいるか判らないが、暗闇で出逢うと人を突き仆たおすのである。そのからだの堅きこと鉄石のごとくであると、家内の者が語った。

劉は獵かりを好んで、常に鉄砲を持ちあるいているので、それを聞

いて笑った。

「よろしい。その怪物が出て来たらば、この鉄砲で防ぎます」

書斎は三間になつていたので、彼はその東の室で寝ることにした。燈火^{ともしび}にむかつて独りで坐っていると、西の室から何者か現われて立つた。その五体は人の如くであるが、その顔が頗る不思議で、眼と眉とのあいだは二寸ぐらいも距^{はな}れているにも拘らず、鼻と口とはほとんど一つに付いているばかりか、その位置も妙に曲がつていた。顔の輪郭もまたゆがんでいる。よく見ると、不思議というよりも頗る滑稽な顔ではあるが、なにしろ一種の怪物には相違ないと見て、劉はすぐに鉄砲をとつて窺うと、かれは慌てて室内へ退いて、扉のあいだから半面を出して窺っているのであ

る。

劉が鉄砲をおろすと、彼はそろそろ出かかる。劉がふたたび鉄砲をむけると、彼はまた隠れる。そんなことを幾たびも繰り返しているうちに、彼はたちまち顔の全面をあらわして、舌を吐き、手を振って、劉を嘲^{あざけ}るかのようにも見えたので、急に一発を射撃すると、弾^{たま}は扉にあたつて怪物の姿は隠れた。

劉は窓格子のあいだに鉄砲を伏せて、再びその現われるのを待っている、彼はふたたび出て来て弾にあたつた。その仆^{たお}る時、あたかも家根瓦の落ちて碎けるような響きを発したのである。近寄ってみると、それは毀^{こわ}れた甕^{かめ}の破片であつた。

更にあらためると、怪物の正体はこの家にある古い甕であるこ

とが判った。

それが不思議な顔をしていたのは、小児こどもがその甕のおもてへいたずら書きをしたのである。小児が手あたり次第に書いたのであるから、人間の顔がおかしくゆがんで、眼も鼻も勿論ととのつていない。それでも人間の顔を具そなえたために、こんな怪をなすようになったのかも知れないというのであつた。

顔良の祠

呂城は呉の呂蒙りようもうの築いたものである。河をはさんで、兩岸に二つの祠やしろがある。

その一つは唐の名将郭子儀かくしぎの祠である。郭子儀がどうしてこんな所に祀られているのか判らない。他の一つは三国時代の袁紹えんしやうの部将の顔良がんりやうを祀ったもので、これもその由来は想像しかねるが、土地の者が禱いのるとすこぶる靈驗があるというので、甚だ信仰されている。

それがために、その周囲十五里のあいだには関帝廟かんていびやう（関羽を祀る廟）を置くことを許さない。顔良は関羽かんうに殺されたからである。もし関帝廟を置けば必ず禍いがあると伝えられている。ある時、その土地の県令がそれを信じないで、顔良の祠の祭りのときに自分も参詣し、わざと俳優に三国志の演劇しやいを演じさせると、たちまちに狂風どつと吹きよせて、演劇の仮小屋の家根も舞台も

宙にまき上げて投げ落したので、俳優のうちには死人も出来た。そればかりでなく、十五里の区域内には疫病が大いに流行して、人畜の死する者おびただしく、かの県令も病いにかかつて危うく死にかかったというのである。

およそ戦いに負けたといつて、一々その敵を怨むことになつては、古来の名将勇士は何千人に崇^{たた}られるか判らない。顔良の輩が千年の後までも関羽に崇^{みこ}るなど、決して有り得べきことではない。これは祠に仕える巫女のやからが何かのことを言い触らし、愚民がそれを信ずる虚に乗じて、他の山妖水怪のたぐいが入り込んで、みだりに禍福をほしいままにするのであろう。

繡鸞

父の先妻の張夫人に繡鸞しゅうらんという侍女こしもとがあつた。

ある月夜に、夫人が堂の階段きざはしに立つて繡鸞を呼ぶと、東西の廊下から同じ女が出て来た。顔かたちから着物は勿論、右の襟の角の反れているのから、左の袖を半分捲いているのまで、すべて寸分も違わないので、夫人はおどろいて殆んど仆れそうになった。やがて気を鎮めてよく視ると、繡鸞の姿はいつか一人になっていた。

「お前はどちから来ました」

「西のお廊下から参りました」

「東の廊下から来た人を見ましたか」

「いいえ」

これは七月のことで、その十一月に夫人は世を去った。彼女の寿命がまさに尽きんとするので、妖怪が姿を現わすようになったのかとも思われる。

ぎゆうえん
牛 冤

ちようあんこう
姚 安公

あつて、その五人は逮捕されたが、王五おうごと金大牙きんたいがの二人はまだ縛ばくに就かなかった。

王五は逃れて、^{かく} 県にゆくと、路は狭く、溝は深く、わずかに一人が通られるだけの小さい橋が架けられていた。その橋のまんなかに逞ましい牛が眼を怒らせて伏していて、近づけば角を^{つの}振り立てる。王はよんどころなく引返して、路をかえて行こうとする時、あたかも邏卒^{ろそつ}が来合^あわせて捕えられた。

一方の金大牙は^{せい}清河橋^{がきよう}の北へ落ちてゆくと、牧童が二頭の牛を追つて来て、金に突き当つて泥のなかへ転がしたので、彼は怒つてその牧童と喧嘩をはじめた。ここは都に近い所で、金を見識っている者が土地の役人に訴えた為に、彼もまた縛^{とぎ}られた。

王も金も回部の民で、みな屠牛^{とぎゅう}を業としている者である。それが牛のために失敗したのも^{いんねん} 因縁^{いんねん}であろう。

鳥を投げる男

雍正ようせいの末年である。東光城とうこう内で或る夜、家々の犬が一斉に吠えはじめた。その声は潮うしおの湧くが如くである。

人びとはみな驚いて出て見ると、月光のもとに怪しい男がある。彼は髪を乱して腰に垂れ、麻の帯をしめて蓑みのを着て、手に大きい袋を持っていた。袋のなかにはたくさんの鵞がちょう鳥や鴨の鳴き声聞きこえた。彼は人家の家根の上に暫く突っ立っていて、やがて又、別の家の屋根へ移って行つた。

明くる朝になって見ると、彼が立っていた所には、二、三羽の

鵝鳥や鴨が檐のきした下に投げ落されていた。それを煮て食った者もあったが、その味は普通の鳥と変ったこともなかった。その当座はいかなる不思議か判らなかつた。

然るにその鳥を得た家には、みな葬式が出ることになった。いわゆる凶きようさつが出現したのである。わたしの親戚の馬ばという家

でも、その夜二羽の鴨を得たが、その歳に弟が死んだ。思うに、昔から喪に逢うものは無数である。しかもその夜にかぎって、特に凶兆を示したのはなんの訳か。そうして、その兆を示すために、鵝鴨がわうのたぐいを投げたのはなんの訳か。

鬼神しよいの所為は凡人の知り得る事あり、知り得ざる事あり、ただその事実を録するのみで、議論の限りでない。

節婦

任士田にんしでんという人が話した。その郷里で、ある人が月夜に路を

行くと、墓道の松や柏のあいだに二人が並び坐しているのを見た。

ひとりは十六、七歳の可愛らしい男であつた。他の女は白い髪を長く垂れ、腰をかがめて杖を持って、もう七、八十歳以上かとも思われた。

この二人は肩を摺り寄せて何か笑いながら語らつていてる体、どうしても互いに惚れ合っているらしく見えたので、その人はひそかに訝いぶかつて、あんな婆さんが美少年と媾あいびき曳びきをしているのかと思

いながら、だんだんにその傍へ近寄つてゆくと、かれらのすがたは消えてしまった。

次の日に、これは何人なんびとの墓であるかと訊きいてみると、某家の男が早死にをして、その妻は節を守ること五十余年、老死した後、ここに合葬したのであることが判つた。

木偶の演戯

わたしの先祖の光禄公こうろくこうは康熙年間こうき、崔莊さいそうで質庫しちぐらを開いていた。
沈伯玉ちんはくぎよくという男が番頭役の司事を勤めていた。

あるとき傀儡師かいらいしが二箱に入れた木彫りの人形を質入れに來た。

人形の高さは一尺あまりで、すこぶる精巧に作られていたが、期限を越えてもつぐなわず、とうとう質流れになってしまった。ほかに売る先もないので、廃^{すた}り物として空き屋のなかに久しく押し込んで置くと、月の明るい夜にその人形が幾つも現われて、あるいは踊り、あるいは舞い、さながら演劇^{しばい}のような姿を見せた。耳を傾けると、何かの曲を唱えているようでもあった。

沈は氣丈の男であるので、声をはげしゅうして叱り付けると、人形の群れは一度に散って消え失せた。翌日その人形をことごとく焚^やいてしまったが、その後は別に変ったこともなかった。

物が久しくなると妖をなす。それを焚けば精氣が溶けて散じ、再び聚^{あつ}まることが出来なくなる。また何か憑^よる所があれば妖をな

す。それを焚けば憑る所をうしなう。それが物理の自然である。

奇門遁甲

奇門遁甲きもんとうこうの書というものが多く世に伝えられている。しかも皆まことの伝授でない。まことの伝授は口伝くでんの数語に過ぎないもので、筆や紙で書き伝えるのではない。

徳州とくの宋清遠そうせいえん先生は語る。あるとき友達をたずねると、その友達は宋をとどめて一泊させた。

「今夜はいい月夜だから、芝居を一つお目にかけてようか」

そこで、橙だいだいの実十余個を取って堂下にころがして置いて、二人

は堂にのぼつて酒を飲んでいると、夜も二更にこうに及ぶころ、ひとりの男が垣を踰こえて忍び込んで来たが、彼は堂下をぐるぐる廻りして、一つの橙に出逢うごとに、よろけて躓つまずいて、ようように跨またいで通るのであった。

それが初めは順に進み、さらに曲がつて行き、逆に行き、百回も二百回も繰り返しているうちに、彼は疲れ切つて倒れ伏してしまつた。やがて夜が明けたので、友達はその男を堂の上に連れて来て、おまえは何しに来たのかと詰問すると、彼はあやまり入つて答えた。

「わたくしは泥坊でございます。お宅へ忍び込みますと、低い垣が幾重にも作られて居ります。それを幾たび越えても、越えても、

果てしがないので、閉口して引返そうとしますと、歸る路にもたくさんの垣があつて、幾たび越えても行き尽くせません。結局、疲れ果てて捕われることになりました。どうぞ御存分に願います」

友達は笑つて彼を放してやった。そうして、宋にむかつて言つた。

「きのうあの泥坊が来ることを占い知つたので、たわむれに小術を用いたのです」

「その術はなんですか」

「奇門の法です。他人が迂闊におぼえると、かえつて禍いを招きます。あなたは謹直な人物である。もしお望みならば御伝授しましょうか」

折角であるが、自分はそれを望まないと宋は断わった。友達は嘆息して言った。

「学ぶを願う者には伝うべからず、伝うべき者は学ぶを願わず。この術も終に絶えるであろう」

彼は悵然^{ちようぜん}として宋を送って別れた。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：九尾乃雪舟斎

2003年8月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

閱微草堂筆記（清）

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>